

# 「増し加わる恵み」

## ローマ人への手紙7章14節—25節

14 わたしたちは、律法は靈的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、罪の下に売られているのである。15 わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。16 もし、自分の欲しない事をしているとすれば、わたしは律法が良いものであることを承認していることになる。17 そこで、この事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。18 わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。19 すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。20 もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。21 そこで、善をしようとするわたしに、悪がはいり込んでいという法則があるのを見る。22 すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、23 わたしの肢体には別の律法があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。24 わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。25 わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

ユダヤの知恵文学の一つにシラ書というものがあり、そこにはこんなことが書かれています。

「はじめに神は人を創造され、その人を性（さが）の力に委ねられた。すなわち、それは我々が欲するならば神の戒めを守ることができるということの意味する。このことを実現するのは我々の忠実な決断と実行による。神は我々に悪をなすなと命じ、我々が罪を犯す免許を与えてはいない。神は我々に律法を防腐剤として与え、もし我々がその律法に心を傾けるのなら、悪の衝動に陥ることはない。神は人を創造された時、人の内に愛情と気質とを植えつけ、聖なる知性を我々の王座につかせられた」

私たちが見ておりますローマ書を書きましたパウロは神が人になされたこのようなことを知っていました。そして、それが全て論理的には事実であることも知っていました。しかし、パウロは別の事実も知っていました。それは人はこの論理、すなわち「もし、我々が欲するなら神の戒めを守ることができる」とか「もし、我々が律法に専心しているならば、悪の衝動の力に陥らない」ということに私達は従い得ないということであり、パウロはどのようにしてそれを知ったのでしょうか。それは簡単です。彼自身、自分の心を神の光の前に照らし出せばそのことは容易に分かったのです。

「分かっちゃいるのにできない」ということがあります。「言っではいけない」と心が叫んでいても「言ってしまう」ことがあります。「やっではいけない」と分かっており、その代償は大きいと知っていても、やっしてしまう、してしまうことがあります。

ユダヤ人は悪の衝動が起こる時、「知恵」と「理性」がそれを克服できると主張しました。すなわち、主のみ言葉の学びに専念していれば安全であり、律法こそが我々の防腐剤であり、悪の衝動が我々の心にはたらく時に、私達の内にある善なる力がはたらくというのです。しかし、パウロは今日の箇所において、そのことに疑問を投げかけるのです。彼は自分は何が善であるのかを知っているが、それをする力がないというのです。

そして、このことをよくよく知っている彼は自らをこのように表現しました「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来て下さった」という言葉は、確実で、そのまま受け入れるに足るものである。わたしは、その罪人の（頭）かしらなのである」（テモテ第二の手紙1章15節）

この箇所において彼は「私は頭です」と言っています。彼の輝かしい経歴と実績を見れば、彼こそは開拓伝道の頭、異邦人伝道の頭、コリント教会の頭、律法学者の頭等々、彼が自他ともに認め得るタイトルをいくらかでも頭に浮かべることができます。しかし、彼はそれらのことには一切触れずに今日の箇所で言っています。「私は罪人の頭です！」と。英語の聖書によるとこの言葉はI am the worst!ということなのです。

パウロの書いた手紙の中には自分の若い愛弟子であるテモテに宛てて書いた手紙があるのですが、実はそのテモテに宛てた手紙のテモテ第一の手紙1章13節にはこんなことが書かれています。「私は以前は神をそしめる者であり、迫害する者、不遜な者であった」。

確かに私達が使徒行伝を読む時にこのパウロがかつてキリスト教徒に対する脅迫、殺害の息をはずませて、家々に押し入って、男や女を引きずり出して、次々に獄に渡して、教会を荒らしまわっていた姿を見ます。彼はそんな荒々しい、ふてぶてしい自分の過去を思い越しつつ、このことを書いているのではないかと思います。

そして、そう考えますと、先に読みましたローマ7章に書かれているパウロの赤裸々な言葉も彼の過去について言っているのではないかと私達は思います。しかし、同時に彼は現在の自分に向かってこの言葉を言っているのだとも言われ、このことは長い間、議論がなされてきました。

実際にこのことに対しては色々な意見があるのですが、7章の22節などを見ると「内なる人としては神の律法を喜んでいる」とありますので、彼は既に神の律法を知り、それに従うことの意味と喜びを知っていたと思われる。故にこれらの告白は彼が信仰を持った後の彼の思いであったと思われる。

さらに、このローマ書7章のパウロの言葉は過去形ではなくて、現在形で記されています。ということはそこに記されていることは全て、既にイエス・キリストにあって回心して、キリストのために全てを捧げて生きていた時に、彼の心の内にあった思いであり、それらのことを思いめぐらす時に、彼は正直に自分は罪人の頭なんだと認めているということになるのです。すなわち、キリストを信じる以前、確かに自分は無知な罪人であったが、今は自分の罪はキリストにあって赦されている。しかし、今も自分の心を奥底を見つめるのなら自分の罪深さをそこに見出し、それゆえに私は今も罪人の頭なんだと彼は言っているのです。

このような真実な心内を明かすことはとてもリスクの伴うことです。このような言葉は「謙遜」とも受けられますが、同時にその人に対する見方において「マイナス」となってしまうようなことも含まれるからです。

しかし、現実はどうでしょうか。誰でも自分の心に手をおいてみれば、このパウロの言葉は私達の心にも響いてくるのではないのでしょうか。パウロは誰もが自分の心に手を置いて考えれば気がかされる赤裸々な姿を、隠すことなく言い表しているのです。皆がふたを閉めて隠しておきたい自分の心の状態はこのようなものなのだとは彼はここに書いているのです。

何が善いことと分かっているながら、まるで何かに操られているかのごとく欲しない悪をしてしまう自分。愛そうと思いつつ愛せない自分。赦そうと欲しながら赦せない自分。やめようと欲しながらやめられない自分。

この現実こそパウロがここで言っていることなのです「私の内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意思は自分にはあるが、それをする力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪はこれを行っている」。皆さんにはこのような葛藤はありませんか？

この人に語るべきことは分かっている。何が正しいことか分かっている。しかし、実際にそのところに立つとそのことを成す力が自分の内にはない。その時にこのパウロの言葉が心に響いてこないでしょうか。「わたしの欲している善はしないで、欲していない悪はこれを行っている」

そう考えるとパウロがこの7章を私たちに残していったということは、私たちにとって感謝すべきことなのであります。もし、彼がこの真実な言葉をローマ書に残さなければ、私たちは自分の内にある得体も知れないものを隠し通すような、建前だけで生きる不健全な偽善的なクリスチャンライフを送ることになるでしょう。心の癒しと解放のためにまず必要なことはまずそこに光が照らされて、このような心の存在が明らかにされることです。ある人はこのことに気がつき、ある人は一生涯、このようなことに気がつくことなく生きています。そう、あのアダムとエバのように全ての責任を自分以外のものに押しつけながら・・・。

パウロはその欲しない悪が確かに自分の心の中にあるということを知っていたゆえに今も自分は罪人の頭なんだと言ったのでしょ。このような自己認識は真っ向から自分の心の思いと向かい合った者の口からでる真実な言葉なのです。

ここまでパウロを見てくると何か非常にかわいそうに惨めに思える方がいるかもしれません。当時も色々な名誉とか役職があったことでしょう。特にパウロのように幼い時からユダヤ教の優秀な師について学んだ者はエリートコースを駆け上ったことでしょう。そのパウロが自分の子供のような弟子テモテに「私は罪人の頭なのだ」と言っているのです。

しかも、このテモテの手紙は数多くあるパウロの手紙のうち、その生涯の一番最後に書かれたものであり、彼は自分の殉教を意識しながらローマの

獄中からこの手紙を書いたと言われています。自分の生涯はこんなに未熟なところから始まったけれども今やその晩年にはこんなところまで上り詰めた、こんな成熟した、ゆえにこれだけの敬意を自分は人からも社会からも受ける者となりましたというのならわかる。しかし、彼のそれはそうではなくて「私は罪人の頭です」などという晩年の自分の肩書きとしては、あまりにも寂しく思われるものだったのです。

しかし実際には「そうではない」とパウロはローマ5章20節で言っています。つまり彼はこう言っているのです「しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ち溢れた」。「罪人の頭」という一見、惨めな響きをもつこの言葉の背後にはこの言葉の存在があります。自らを罪人の頭と呼ぶ者の上に注がれている神の恵み、憐れみは彼の上に満ち溢れているということです。

神の恵みとは何でしょうか。そう、神の恵みとは「愛するに値しない者が、愛される」ということです。それは条件がつかない愛を意味します。大抵、私達が言うところの愛は条件つきです。あの人はこのことをしてくれるから、彼、彼女は私の愛の対象です。あの人はもはや私の愛の対象ではありません。なぜなら私の意にかなわなくなってしまったから。これが私達が言うところの愛です。しかし、神の愛は無条件です。この神の愛をして、私達はそれを恵みと呼ぶのです。そして、その恵みは十字架に集約されるのです。十字架に磔にされているイエス様の足元には注意書きがありましたか。「このキリストの救いはそれなりにまじめに生きた人にのみ有効」と。いいえ、キリストの十字架はいかなる人をも救うのです。そこに私達が修練してパスしなければならないハードルはありません。

そもそも、なぜ私たちは救いという恵みを受けたのでしょうか。テモテ第1章16節にこうあります「しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠の命を得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示して下さったからです」 "Christ Jesus might display his unlimited patience as an example for those who would believe on him and receive eternal life". とパウロは書いています。

このような罪人の頭のような自分にイエス様は今も恵みを注いで下さり、限りない寛容を示して下さっている。そして、それだけではなく、その満ち溢れた恵みは今後、これから後、このイエス様を信じようとしている

人々を励まし、その見本となるべく自分に恵みを注ぎ続けてくださっている。

神様はペテロやマタイがそうであったように、おおよそ地位、名誉をもつ有名人とかに、その大切な福音伝道を委ねることをなさいませんでした。では、誰にその福音を託したのか。「我は罪人の頭なり」と自身を称する者たちによって福音は全世界に広がっていったのです。なぜなら、彼らこそ神の恵みを一番、知る者達だからです。愛されているということが一番よく知っているものだからです。そのことを知る者達により福音は力強く前進してきたのです。

神様は人間の思いや知恵の及ばない計画をもっておられます。私達は日々、自尊心を高めようと躍起になっています。どうにか自分を人より抜きん出ている、いっばし人間だということを誰にも認めさせようとしています。しかしそのような世の中にあって「我は罪人の頭なり。しかし、そのような私には神の恵みが満ち溢れている」と言う者が、その神の恵みに応えて生きていくことを神様は求めておられるのです。

ルカの7章にはパリサイ人の家で食事をしていたイエスのもとに町で罪の女と呼ばれていた一人の女性がやってきて、泣きながら、その涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油を塗ったという記事があります。その時にイエスを招いていたパリサイ人は心の中で思いました「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」（ルカ7章39節）。

その時にイエス様は彼に向かいこんなたとえ話を話し始めました。「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりには五百デナリ、もうひとりには五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったので、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた「あなたの判断は正しい」（ルカ7章41節-43節）。そして女の方に振り向いて言われました。「この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」（ルカ7章47節）

彼女を見る者達は彼女の名を呼ばずに彼女を「罪の女」と呼んだのです。ですから当然、彼女自身も自分はどんな女であるかを知っていました。それゆえにイエスの元にやってきて人目をはばからず自分がイエスのためにできることに心を込めたのです。そう彼女は自分が何者であるかを知っていますから、その自分に対するイエスの計り知れない愛、恵みに彼女は自分ができる精一杯をもって応えたのです。これが恵みというものがなせるみわざなのです。

しかし、ここで一つの疑問が起こります。それではここにいるパリサイ人はこの女よりも神の前に罪が少ない者であったのかということです。いいえ、人は皆、神の前で等しく罪人です。このことにおいてこの女とパリサイ人に違いはありません。ここで多く赦された者というのはすなわち、自分が罪人であるということを自覚している者であるということであり、そんな自分に注がれる神のあわれみと愛に圧倒されている者のことです。そこに注がれている神の恵みがあまりにも大きいのでこの女は自分ができる最善をイエスになしたのです。

私たちは明るい光に照らされれば照らされるほどに、光に近づけば近づくほどに今まで見えなかった自分が照らされます。それと同時に光に近づけば近づくほどに光の暖かさを知ります。すなわち私達は神様に近づけば近づくほどに、その聖なるお方のご性質ゆえに、私たちの気がつかなかった暗き部分が照らしだされます。それは辛いことかもしれない。目をそむけたくなるかもしれない。しかし、神の恵みは大いなる温かさをもって、その暗き自分を赦し、包みこんでくださる。罪の増し加わったところに、恵みもますます満ち溢れるのです。

パウロは先のローマ七章の赤裸々な告白をこう締めくくっています。「わたしはなんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死の体から私を救ってくれるだろうか。わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな」

皆さん、キリスト教の最大のギフトなる恵みとは、この我は罪人なりという者の傍らにあるのです。そして、神様はその恵みを知ったあなたを通して今後彼を信じて永遠の命を得ようとする者の見本となさしめて下さるのです。あなたが過去にどんな生き方をしてきたかということが問われるのではなく、今、そんなあなたがキリストの愛に対してどのように生きているかということが問われるのです。

2017年10月29日 「増し加わる恵み」

今日、お尋ねしたいと思います。皆さんの肩書きは何ですか。皆さんの職場で与えられているタイトルがありますでしょう。かつては社会的に高い地位をもっておられたという方がいるかもしれません。あるいは駆け出しのセールスパーソン、家庭を守る主婦という方もいるかもしれません。それらはどれも素晴らしい肩書きです。なぜなら、その背後にはそのタイトルに相応しい者であろうという皆さんのたゆみない日々の証があるからです。しかし、それらの中でも「イエスの恵みを知る者」という肩書きこそが私達にとりましては最も大いなる肩書でありましょう。この肩書と共に私達が生きるのなら、今日から私達の生涯は全く違ったものとなりますでしょう。

聖書にはパウロが書きました13の手紙が記録されていますが、その13の手紙、全てにおいてパウロはその冒頭にこう書いています。そう、一つ残らず、その第二文までに必ずこんな言葉でパウロはその手紙を書き始めるのです。「恵みと平安とが、あなたがたにあるように！」 Grace and peace to you from God our Father and the Lord Jesus Christ.

恵みはパウロ自身がその生涯で神様から受け取った最高のものなので、彼が私たちに望む最高のものも、いつも神の恵みなのです！

お祈りしましょう。